

京都における歴史災害とその気象・気候的背景

水越 允治*

I. はじめに

歴史時代の災害については、従来その実態を中心にとりあげられ、また年表形式によってまとめられたものも多い。もちろんこのような成果は歴史災害を知り、その原因や構造を検討する上に基本的に重要なものであるに違いない。さらに、災害発生当時の社会的背景や影響について論じた研究も多数存在する。

ところで、災害発生時の自然環境条件が災害規模の大小に関ってくることについて、詳細に調査した例はまだ少ないようである。筆者は永年にわたって古記録に記載された日々の天気記録を収集してきたが、災害の種類によっては、発生時の天気ばかりでなく発生前の天気・天候が、災害の拡大要因としてかなりの影響を持っている印象を受けた。自然災害では風水害、人為災害では火災がその例である。

千年の都であった京都では、数多くの災害がその間に発生し、災害に関する詳細な記録も残っている。これら災害のうち、地震は気象・気候条件とは一応無関係に起ると考えられるのでこれを省き、気象・気候災害の代表である風水害と、人為災害ではあるがともすると気象条件が拡大要因ともなる火災について、主として近世の大災害の中から幾つかを選んで、その気象・気候的背景を探ってみよう。その前に、古記録を歴史時代の気象や気候の復元に利用する利点と問題点について触れておこう。

II. 古記録による気象・気候復元の利点と問題点

古記録による気象・気候復元は、日々の天気を基本にして、短い時間を単位とした結果が得られ、またその集積によって季節や月毎の天候や気候の特徴、あるいは永年の気候推移を把握することも可能な点に特色がある。しかしその反面、記録者による天気表現が多様かつ主観

的であるため、資料をそのまま用いたり、複数の資料を相互に比較することはでき難い。筆者もこれまでに若干の試みを行ってきたが、部分的に興味ある結果を得ているものの、未だ十分満足できる域には到達していない。今後の課題として残された事柄である。

III. 京都の大火と気象・気候条件

本題に戻って、まず火災と気象条件との関係を日々の天気記録を用いて考察してみよう。

京都における近世の大火は十指に余るほど発生しているが、その中から特に大きな4例を挙げてみよう。

1. 宝永5年3月8日(1708年4月28日)の大火

この大火は8日早朝、油小路通姉小路角の銭屋市兵衛宅を火元として発生し、内裏を始め、南北は錦小路通から今出川通まで、東西は鴨川から油小路通までの四百余町、一万数千戸を焼き尽くし、翌日早晩に漸く鎮火した火災である。天気記録によれば、出火当時は南西の強風が吹いていた模様で、火の手は火元から北東方向に延焼していった。このような風は日本海に発達した低気圧がある時に生じ、春にしばしば現れる気圧配置である。出火当日とその前後の京都を含めたこの地域の天気記録を第1表に掲げる。この表から大火の要因は、強風ばかりでなく、極度に乾燥した大気条件にあったと推定される。一年の中でもこの季節は周期的に天気変化があり、晴天と雨天とが適宜繰り返される時期であるが、この年は出火当日まで十日余も晴天が続き、名古屋では前々日の3月6日には砂塵が舞い上がる程であったことが表から読み取れる。実に悪条件が揃っていた際の火災であった。発生の翌日になって雨が降り出した。この雨は日本海の低気圧より南西に延びた寒冷前線が通過し、北風によって後降り出したと思われる¹⁾。この降雨によって火災も漸く下火になったが、もしこの雨がなかったら、さらに被害が拡大したかもしれない。

2. 享保15年6月20日(1730年8月3日)の大火

この火災は上立売町大文字屋五兵衛方より出火し、翌

* 三重大学名誉教授

第1表 京都 宝永5年の大火前後の天気表
1708年4月下旬(宝永5年3月1日～10日)天気表

日付 和暦	4月21日 3月1日	4月22日 3月2日	4月23日 3月3日	4月24日 3月4日	4月25日 3月5日	4月26日 3月6日	4月27日 3月7日	4月28日 3月8日	4月29日 3月9日	4月30日 3月10日
現在の地名 (資料名)										
名古屋 (鸚鵡籠中記)			快晴、 暖	晴		昼比より西 風強吹、揚 砂終夜不止、		薄曇わるさ むし、南風 吹、夜ル臥 具寒天の如 し(京大火 記録詳細)	暁より雨降 出、終日湿 然たり、夜 更止、属晴	晴
京都 (知恩院日鑑)	晴	晴	晴	晴	晴		晴	晴、未申風	曇、小雨	晴
京都 (北小路日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	陰	晴
奈良 (東大寺三綱所日記)	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天 (京大火)	少雨	晴天午剋 前雷一ツ 鳴
奈良 (西大寺日記)	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天 (京大火)	曇天風雨	曇天風吹
大阪 (大念仏寺日鑑)	晴天	晴天	晴天	晴天	曇天	晴天	晴天	晴天	曇天	曇天
伊勢 (外宮子良館日記)	晴	晴	陰晴	晴	晴	晴	晴	晴	雨	晴

日にかけて西陣一帯を焼亡させた大火であり、‘西陣焼け’と呼ばれている。真夏の大火は珍しい方であるが、天気の推移を見ると火災が広がった原因は、やはり大気条件にあったと推定される。第2表に大火前後の日々の天気を掲げる。この表を見ると、火災を拡大させる条件として、第一に京都では局地的に夕立程度の雨はあったが、連日の炎天で大気も大地も乾燥しきっていたこと、第二に東よりの風がかなり吹いていたことが指摘できる。京都にとって東よりの風は、ある条件のもとでは、比良山地を吹き越えるフェーン的な性質を持つことがあり、この火災の際には、恐らく京都盆地に高温低湿な気流をもたらしたと思われる。日本の夏は一般に高温多湿であるが、このときに限って東よりの乾燥した熱風が吹いていたことは、実に不幸なことであった。この東よりの風が吹いたわけは、伊勢の記録を見るとほぼ見当がつく。すなわち南の太平洋上に台風があったが、日本を覆っていた夏の太平洋高気圧の勢力が強かった為に、本土に接近上陸することができなかった。しかしその台風の前面では、湿潤な東よりの風が紀伊山地の南東斜面に吹き付け、そのため伊勢方面に雨が降った。この湿潤な気流の一部が内陸まで侵入してきて、比良山地を越えるフェーンとなったものであろう。このような気象条件は、

頻繁に起るものではなく、‘西陣焼け’はたまたま稀な条件下で起った不運な出来事であったと言えよう。旱天続きで川・池・井戸の水位が下がり、消火用の水も不足していたのではなかろうか。

3. 天明8年1月30日(1788年3月7日)の大火

この火災は京都の歴史の中でも空前絶後の規模の大火で、内裏や二条城を始め、神社仏閣二百余、千四百余町を焼尽し、焼失戸数四万戸近く、死者千八百人を越えたといわれる大惨事となった。火災は翌々日の九日になって漸く鎮火したが、応仁の乱以来の大火といわれている。火元は鴨川の東、宮川町筋の団栗の図子で、卯の上刻に出火し、折からの東よりの強風にあおられ、鴨川の西の中心市街地各所に飛び火した。当時の気象条件がどのようなものであったかは、第3表によってほぼ推定することができる。すなわち、火災発生の前日まで天気が続いて、かなり乾燥した状態になっていたところ、徐々に低気圧が接近して天気が崩れかかった頃に、出火したことがわかる。この低気圧はかなり発達しながら本州南岸沖を通過した模様で、すでに前日に東風の記載が池田で見られ、京都では夜半前から風が強くなっている。この風は低気圧の東進に伴って、次第に南東に変り、そのため初め寺町通、烏丸通などを越えて、西の壬生方面に延焼

第2表 京都 享保15年6月20日の大火（西陣焼け）前後の天気表
1730年7月26日～8月6日（享保15年6月12日～23日）天気表

日付 和暦	7月26日 6月12日	7月27日 6月13日	7月28日 6月14日	7月29日 6月15日	7月30日 6月16日	7月31日 6月17日	8月1日 6月18日	8月2日 6月19日	8月3日 6月20日	8月4日 6月21日	8月5日 6月22日	8月6日 6月23日
現在の地名 (資料名)												
高山 (陣屋日記)	晴	晴天 晩 方夕立降	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
鱒江 (間部家日記)	天気克	天気克	天気克	天気克	天気克	昼八時雷雨 少ふる	天気克	天気能	天気克	天気克	天気克	天気克
京都 (鴨脚家日記)	晴 入夜少 夕立 雷二 三声	晴	晴 暑気 甚 悩乱	晴	晴	晴 時々細 雨下	晴 時々細 雨下	晴	晴	晴 炎暑 甚	晴 暑気甚 万物変色	朝之間少雨 即霽
京都 (通兄公記)									注1)			
京都 (知恩院日鑑)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	曇	晴	晴	晴	晴	晴
京都 (妙法院日記)	晴	晴	晴	晴	晴	陰晴	陰晴	陰晴	晴	晴	晴	曇或雨
伊丹 (八尾八左衛門日記)	夕立	晴	晴	晴	晴	晴	晴 頃日は 東風吹候	晴	注2)	晴	晴	夜明雨
池田 (伊居太神社日記)	天キ 七ツ 時少し夕立	天キ	天キ	天キ	天キ	天キ	天キ 夜八 ツ時大夕立	天キ	天キ	天キ	天キ (京火事)	天キ 土用 明キ 注3)
伊勢 (外宮子良館日記)	晴	晴 朝小 雨	朝小 雨 晴	晴	曇	雨	雨 夜中雨 風	雨	陰晴	晴	晴	曉雨 自己 刻晴

注1) 未許剋上立売辺焼亡 風自東北吹 或東南吹 猛炎熾盛 (中略) 火猶未滅 延至 西南方又西北方 到子許剋漸勢微 (中略) 及丑終滅云々
 注2) □ 未刻京上立売新町大文字屋五兵衛方より出火 東南風ニ而北野迄やけ (後略)
 注3) 廿三日より廿五日迄雨乞

していた火の手が、北西に向って燃え広がり、内裏や二条城が罹災する結果となった。夜に入って低気圧の中心が近畿地方に最も近づいた頃には、雷を伴う雨が大阪方面では降っている。夜半に低気圧が通過すると、風は西よりに変わりさらに強く吹いた。従って、火勢は東へ転じ、再び鴨川を越えて東山方面に延焼した。このように天気が悪く、雨や雪が降ったにもかかわらず大火となったのは、前日までの晴天で乾燥状態になっていた上に、強風が吹き荒れ、かつ風向きが二転三転したことによっている。現在の京都市街地の主要部をほとんど焼き尽くした天明の火災も、気象条件が最悪であったことが拡大要因と考えられる。

4. 元治元年7月19日（1864年8月20日）の大火

この火災はよく知られているように、禁門の変（蛤御門の変）に伴って発生したいわゆる‘鉄砲焼け’の大火である。近世の京都の火災では、天明の大火に次ぐ規模のものであった。御所から南へ、上京の一部と下京の主要部を含む八百余町、三万戸近くが焼失し東本願寺も類焼している。火災の少ない夏にこれほどの大火となった原因は、戦闘により各所で出火したことにもよるが、異常な旱天続きのあげくの事件であったことが大きく影響している。第4表は事件当日前後の各地の天気を示した

ものである。この年の梅雨は7月上旬に早々と明け、以後近畿地方一帯では局地的な夕立を除いて、まとまった雨は降っていない。また各地で雨乞いが行われた記録も存在する（その状況を捉えるには、もっと長い間の天気表を掲げる必要があるが、スペースの都合で割愛する）。さらに事件の前々日頃に、西よりの風が吹き出して、フェーンのような条件をもたらしていることは、享保の大火の場合とよく似ている。前日から当日にかけては、弱い気圧の谷が通過して、各地に少しばかりの雨を降らせてはいるが、乾燥状態を解消させる程ではなく、引き続いて北または西よりの風を吹かせる結果となったことなど、火災の広がりを支えるような状況であったと推定される。

5. まとめ

以上4例の大火についてまとめると、大火は季節を問わず乾燥と強風またはフェーンの条件下で起っており、現在にもそのまま適用できる気象的要因である。東西と北を山に囲まれた京都では、南寄りの風はしばしば強風をもたらす。一般に南寄りの風は暖湿であるが、日本海を発達した低気圧が東進する際にはとくに強い風が吹きやすく、警戒を要する。このような気圧配置は冬の終わり頃から春にかけて現れることが多く、晴天続きの後

第3表 京都 天明8年の大火前後の天気表
1788年3月上旬(天明8年1月24日～2月3日)天気表

日付 和暦	1日 1月24日	2日 1月25日	3日 1月26日	4日 1月27日	5日 1月28日	6日 1月29日	7日 1月30日	8日 2月1日	9日 2月2日	10日 2月3日
現在の地名 (資料名)										
鯖江 (間部家日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴		晴	曇
丹生川(岐阜県) (横山六兵衛日記)			夜雨			夜雨				
加賀市 (笠間日記)	極上日	上日	上日 上日	大極 上日	上日	大極上日	今晚雨降る、其後 晴れる	夜中より雨 降る	大極上日	曇る、風出
上石津(岐阜県) (西高木家日記)	晴天	晴天	晴天	雨天、五ツ半 過より晴天	晴天	曇り	曇、風烈	晴天	晴天	晴天
京都 (仏光寺御日記)							晴、夜来大風、夜 ニ入小雨	晴	晴	晴
京都 (杉浦家歴代日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	昨夜亥刻後風強、 終日風少も不止、 雪降、東南の風吹 通す	晴	晴	晴
池田 (稲東家日記)	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	くもる、晴 天、東風	曇、大風雷、夜雨	晴天	晴天	晴天
大阪 (兼葎堂日記)							風、晩雨、夜雷アリ			
大阪 (大念仏寺日鑑)	晴	晴	晴	晴	晴	曇	晴風	晴	晴	晴
三河田原 (田原藩日記)	快晴	快晴	快晴	雨天	雨天	曇			快晴	快晴
伊勢 (常陳卿日次)	晴	晴	晴	雨	晴	陰	風雨	晴	晴	晴

火災の危険度が高い。その他の方向の風は台風やとくに発達した低気圧の接近時以外には、強くは吹かないが、東の比良山地・北西の丹波高原を吹き越えてくる風が、山の風上側で暖湿な状態にあると、京都盆地へ乾いたフェーン風となって吹き下りる場合があるので、油断はできない。さらに旱天が続くときには、河川や池あるいは井戸の水も少なくなるので、消火用の水が不足して、大火になったこともこれまでにあったのではなかろうかと推測する。

IV. 京都の風水害と気象条件

1. 概観

京都に風水害をもたらす気象条件は、台風と梅雨期の集中豪雨が主要なもので、この条件は中央日本から西南日本一帯の地域と共通である。ただし、梅雨期の集中豪雨は南西からの湿潤な気流が侵入しやすい地域に多い傾向があり、紀伊水道から大阪湾をへて淀川流域に至るコースは、そのような気流の経路の一つと考えられる。したがって、京都付近も比較的豪雨が起りやすい地域に入る。台風の場合にはその経路や強さも様々であるので、

一概にどの地域が風水害を受けやすいということはないが、梅雨時の豪雨と台風による風雨とを合わせると、京都を含めた近畿地方では、かなりの頻度で現れるようである。筆者が16世紀について天気資料によってまとめた結果では、京都とその付近での風水害発生の頻度は百回に近く、平均して年に一度は発生したことになる。防災対策の進んだ今日では発生の危険度は小さくなってきているであろうが、風水害の発生に結びつく気象条件は、現在でもしばしば現れることを忘れてはならない。

中島(1983)²⁾の鴨川の水害に関する研究によれば、歴史時代のうち15世紀前半と18世紀後半に大雨洪水がことに多かったことが指摘されているが、本稿ではとくに被害の大きかったと思われる16世紀以後の3例について、当時の気象条件を考察してみよう。

2. 慶長3年5月15～17日(1598年6月18日～20日)の豪雨

発生時期からみて、明らかに梅雨期の集中豪雨である。第5表に前後2週間程の日々の天気記録を掲げる。京都では5月8日から連日のように雨が降り、13日に少し回復したが、その後猛烈な雨に見舞われ、22日になって漸く上がった。とくに15～17日の3日間は烈しい降りて、現在の京都市南部を中心に、河川の氾濫、山崩れが起っ

第4表 京都 元治元年7月19日（禁門之変）前後の天気表
1864年8月15～21日（元治元年7月14日～7月20日）天気表

日付 和暦	8月15日 7月14日	8月16日 7月15日	8月17日 7月16日	8月18日 7月17日	8月19日 7月18日	8月20日 7月19日	8月21日 7月20日
現在の地名 (資料名)							
高山 (陣屋文書「御用場日記」)	晴	晴	晴	晴	晴	雨	晴
鯖江 (間部家日記)	曇	晴	晴	晴	曇朝小雨	晴	晴
豊岡 (鳥井家公私之日記)	天気	天気	天気	天気	誠ニ久シ振にて雨天	雨不降候、後雨天	上天気
上石津(岐阜県) (西高木家御用日記)	天気	天気	天気	天気	天気、風烈	曇、今朝はらはらふり	天気
近江八幡 (市田家歴代日記)	晴、暑し	晴、暑し	晴	晴	朝陰り昼前ハラハラと 雨降る、涼風出る	朝陰り昼後晴ル、秋風 頻也	晴涼し
京都 (速水家日記)	晴	晴、未刻過 夕立雷鳴、 至夜電光	晴、未刻許 驟雨、夜月 光清明	晴	晴	曇	晴
池田 (稲束家日記)	晴天	晴天、雷鳴 少	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
津 (中川藏人政學日記)	晴	晴酷暑	晴残暑酷	晴西風残暑酷 烈、夜清光	晴西風漸涼、夜清光、 夜半過より漸雨	雨天草木蘇生、新涼愉 快	晴、夜来真涼、秋気 可入
射和(松阪) (竹川竹齋日記)	烈日暑熱	同上	同上	同上	同上西風有、ハロ四分 余下ル	暑、ハロ五分下り、昨 夜半頃より雨、今朝式 部余上ル、終日折々雨 凡五寸湿リ	快晴、雨乞礼おとり
三河田原 (田原藩日記)	晴	□ムシ	□ムシ	晴	晴	雨	晴
伊勢 (外宮子良館日記)	晴	晴	天	晴	晴	雨、六月朔日ノ夕立ヨ リ今日迄白雨なし	晴、入日誠紅シ、後 日承り候処京都兵火 ニ而大火ニなり申由
和歌山 (小梅日記)			月色大によ し	毎々暑し	少しくもり、夕方ばら ばら降、七ツ過よりは、 たへず少しづつ降、大 に涼気、此節日でり打 つづき(後略)	昨夕より催し有れども 降かねる、併大に涼気	そよそよ風有、空は 晴
田辺 (田所家御用留)	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天、夜少々雨降ル	曇天、巳下刻比少々雨 降ル	晴天

ている。鴨川が洛中で氾濫したという記事は見当たらないが、宇治川との合流点、伏見一帯の地域での被害が大きい様子が見られる。この例のように連日の降雨に追いかけて大雨が降れば、大水害となる危険が高まるわけで、淀川上流部の諸河川域のどこに大雨が降っても、京都に水害が生じる可能性が大であると考えられる。

3. 嘉永元年8月12～13日(1848年9月9～10日)の風水害

京都の災害史によれば^{3,4)}、この風水害は慶長以後の近世において、最も大きい被害をもたらしたものとされている。災害の詳細は災害史に明らかであるので略し、その日を含めた前後10日間程の各地の天気を第6表に掲げる。この表からも、風水害の直接原因は、強い台風の襲来であったことがわかる。この台風は紀伊半島に上陸し、近畿地方を北東に進んだと推定される。その根拠は、伊勢平野方面で風害が大きかったこと、松坂の風向が時計

廻りに変化していること、京都・大坂・和歌山方面では風による被害もあったが、むしろ水害の記録が大きく取上げられていることによる。すなわち、台風の進行方向の右側では風がとくに強く、風向が東南から南を経て西に変るのに対し、左側では風もそこそこ強いが、むしろ大雨の被害が大きくなる傾向がある。この例では京都・大坂などで水害が大きかったことや、大阪湾など沿海部で高潮の記録が見つからないことなどから推定して、台風は1959年の伊勢湾台風に近いコースを取ったものと思われる。

ところで、京都でこれほどの水害になったわけは、この台風の直前に別の台風が襲来していたことにある。第6表を見ると、8月8日から9日にかけて、近畿地方各地で大風雨があり、京都はこの時には大きな被害はなかったようであるが、近畿南部から東海地方にかけては、か

第5表 1598年6月10日～25日（慶長3年5月7日～22日）天気表

日付 和暦	6月10日 5月7日	6月11日 5月8日	6月12日 5月9日	6月13日 5月10日	6月14日 5月11日	6月15日 5月12日	6月16日 5月13日	6月17日 5月14日
資料名								
お湯殿の上の日記	はるゝ	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	はるゝ	雨ふる
義演准后日記	晴	大雨	大雨	雨	雨	霧	雨、巳刻属 (ママ)	晴、及 晩 雨降
三藐院記								
舜旧記	天晴	雨降、洪水 以外	雨降	雨降	雨降	雨降		雨降
言経脚記	天晴	雨	夜雨	小風、晴陰	晴	天晴、細雨	天晴	晴陰、入夜 雷鳴、雨
日付 和暦	6月18日 5月15日	6月19日 5月16日	6月20日 5月17日	6月21日 5月18日	6月22日 5月19日	6月23日 5月20日	6月24日 5月21日	6月25日 5月22日
資料名								
お湯殿の上の日記	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	雨ふる	はるゝ
義演准后日記	大雨、洪水雷 鳴、雫ニ入敷、 終雨不晴	雨①	大雨洪水②	午剋属晴、 聊散朦朧	陰、晩雨降	雨降	雨	雨降、午剋 属晴
三藐院記								
舜旧記	雨降	雨降	雨降	雨降	朝晴、巳刻 雨降	雨降	朝霧、未刻 雨降	雨降
言経脚記	雨	雨	雨	晴				

①「霖雨洪水、終日朦朧、伏見石田以下新屋敷水ニ漬」

②「伝聞、洪水以外、伏見在家、山崩カ、リテ顛倒云々、石田・木幡新在家、水ニ悉漬、舟ヲサシテ通路云々」

なりの雨が降って、田辺では百年来の大水との記録が見られる。この時の台風は紀伊半島に上陸したかまたは接近して通ったか明らかではないが、近畿地方一帯にたっぷり雨を降らせたことは確かである。このような下地ができていたところへ、追い討ちをかけるように12日の台風がやってきた為に、大きな水害が発生したのであろう。この場合の京都の大水害は、二つの台風が相次いで襲来した結果であった。

4. 嘉永5年7月21～22日(1852年9月4～5日)の風水害

先の水害の記憶もまだ新しい嘉永5年に、京都は又もや大水害に見舞われた。今回は鴨川筋の出水が著しく、三条・五条の橋が落ち、川を挟んで東西の交通が難儀になるほどであったと言う⁵⁾。この風水害も嘉永元年の場合と同じく台風の襲来によるものであったが、京都が最もひどい洪水の被害を受けた様子で、風の被害はともかく、雨による被害が記録には詳しく書き記されている。この時の台風も京都の南東方を通過した様で、紀伊半島に上陸後東よりに進路をとり、東海地方や関東地方にまで水害をもたらしている。鴨川以外にも、京都を流れる諸河川の水位がとくに高くなった理由は明確にはわから

ないが、第7表を見ると一週間ほど前に但馬方面で大雨洪水が起っていることと関わりがあるかも知れない。流域が違うので断定はできないが、この方面で大雨が降った時に、丹波高原一帯にもかなりの雨が降ったのではなからうか。もしそうだとすれば、鴨川や桂川の水位は平常よりもかなり上がっていたと思われ、そこへ台風の大雨が加わって大洪水を引き起こしたという推定も成り立つ。台風が東よりに進んだとすれば、若狭湾方面から丹波高原に向けて北よりの風が吹き、この方面での雨量が多くなる条件が発生する。天気表を見る限りでは、洪水の起る前の河川水位が鍵を握っているように想像される。観測時代の類似例を探して検証してみることが必要であろう。

V. おわりに

以上京都の大火と風水害について、数例ずつを挙げ、発生した日の前後の天気記録を用いて、拡大原因の考察を試みた。大災害がすべて気象条件に結びつくとは考えられないにしても、発生前後の天気・天候を知ること

第6表 1848年9月1～11日（嘉永元年8月4～14日）天気表

日付 和暦	9月1日 8月4日	9月2日 8月5日	9月3日 8月6日	9月4日 8月7日	9月5日 8月8日	9月6日 8月9日	9月7日 8月10日	9月8日 8月11日	9月9日 8月12日	9月10日 8月13日	9月11日 8月14日
現在の地名 (資料名)											
高山 (陣屋日記)	晴	晴	晴	晴	晴	雨	晴	晴	曇	雨	晴
鱒江 (問部家日記)	晴	晴	晴	曇	曇	雨	晴	晴	曇	雨	晴
豊岡 (由利家公私之日記)	晴天	晴天	□(晴カ)天	雨天	曇	大雨	天気	天気	大雨	雨天	先晴
上石津(養老) (東高木家御用日記)	晴天	晴天	□(晴カ)天	晴天	曇	大雨	天気	曇	曇	四ツ時迄少々雨	六
近江八幡 (市田家歴代日記)	晴	晴	晴	晴	晴	風	晴	晴	折々村雨有	有之	晴
京都 (塚田家日記)	晴	晴	晴	晴	晴	風	晴	晴	曇	風雨	晴
大阪 (鐘奇斎日々雑記)	晴	晴	晴	晴	晴	風	晴	晴	曇	曇	曇
池田 (稲東家日記)	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
津 (中川藏人政學日記)	晴	朝過雨	晴	夕方	長瀬天氣	風雨	陰天	陰天	長瀬天氣	霧景西風	晴
松阪(射和) (竹川竹齋日記)	天氣	天氣	天氣	折々雨	曇	昨夜より	天氣	折々雨	長瀬もやぶ	天氣	快晴
田原 (田原藩日記)	晴	晴	晴	晴	晴	雨	晴	晴	晴	晴	晴
伊勢 (外宮子良館日記)	晴	晴	晴	陰或風	雨	大雨	晴	雨	雨或風	晴	晴或夕立
田辺 (田所家御用留)	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	雨天	晴天	雨天	雨天	晴天	晴天

注1) 今夜六ツ時過より追々雨強く相成、夜半頃大風雨ニ相成而大小川々出水(中略)近年無之出水(後略)
 注2) 西風ニ相成、折々雨降、注3) 申刻又一頓小平時斗雨、東風不止、注4) 徹夜暴風九日ノ洪水ヨリ大也
 注5) 暮夕方より風雨終夜不休、注6) 晩より西風ニ替、是は暴烈、倒木、家屋風損、塔世川出水
 注7) 4ツ頃より益烈風、初辰巳より南へ廻り、八ツ頃甚敷、七ツ頃より未申ニ風廻り追々雨薄成、風も和らき朝ハ大かた天気ニ成、前川満水ハ八ツ時水嵩追々減
 注8) 宮中所々頓倒木数多有之(後略)、注9) 今朝四ツ時前大水九合(中略)今日の出水田辺川は九合(中略)雷田川ハ百年以来不覚大水也

第7表 1852年8月22日～9月6日(嘉永5年7月8日～23日) 天気表

日付 和暦	8月22日 7月9日	8月23日 7月10日	8月24日 7月11日	8月25日 7月12日	8月26日 7月13日	8月27日 7月14日	8月28日 7月15日	8月29日 7月16日	8月30日 7月17日	9月1日 7月18日	9月2日 7月19日	9月3日 7月20日	9月4日 7月21日	9月5日 7月22日	9月6日 7月23日
現在の地名 (資料名) 高山 (陣屋日記)	晴、昨夜より雷雨、冷気甚し	晴、冷気	曇、冷気	曇、時々雷雨	曇、時々雷雨	晴	晴	晴	晴	晴	晴、白雨	晴	曇、時々微雨	雨	晴
鯖江 (岡部家日記)	晴	朝雨曇比晴	曇	雨	雨	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	雨	風雨(中略)注1)	雨
豊岡 (由利家公私之日記)	上天気、夜ニ入少雨	雨	大雨	今日のは快晴、折々雨天、川水増	雨天、今日川水六尺斗出申候	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
上石津 (東高木家御用日記)	晴、昨夕湿雨有之	晴	曇、夕方より雨降	曇	曇、昨夜雷鳴雨降	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
近江八幡 (市田家歴代日記)	晴、暑し	晴、四ツ時晴	陰り夜ニ入雨降、昨夕より冷気ニ相成	晴、暑強し	晴、暑強し	晴、暑強し	晴、暑強し	晴、暑強し	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
京都 (杉浦家歴代日記)	晴、亥刻後雨	晴、今晩雨	晴、冷気	晴、今晩雨	晴、今晩雨	晴、今晩雨	晴、今晩雨	晴、今晩雨	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
京都 (若山要助日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
大坂 (籠奇者日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
池田 (稲東家日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
津 (中川藏人政事日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
松阪 (竹川竹斎日記)	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
西尾 (下永長陣屋日記)	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	快晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
田原 (田原藩日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
伊勢 (外宮子長館日記)	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天
田辺 (田所家御用留)	晴天、今晩雨	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天	晴天

注1) 洪水ニ面村方ニ相成 注2) 但し屋よりは晴れ申候 注3) 大雨川水老丈三尺余 注4) 川々出水之事(須谷川切出出来、その他各地水害記事有) 注5) 川々止ル(印込)
 注6) (中略) 廿二日辰刻時分ニ漸々静相成、雨も小降ニ成、或ハ止、又午刻ニ至晴ル、又午刻雨暫時申刻後未快晴(以下賀茂川筋洪水の記事有) 注7) 辰刻より雨止、北気冷敷雲立
 注8) 巳刻ヨリ漸ニ雨弱雨、無間断七ツ時ヨリ雨(中略) 戌刻より乾風終夜夜半頃より東別別暴(曇カ) 風、卯刻より大雨也

よって、災害の発生過程や特性がより明確になると思われる。地震や火山噴火のような気象条件とは一応無関係な異常な自然現象でも、発生後の災害状況に気象・気候条件が場合によっては関わってくるのではないかとも考えられる。歴史時代の災害を、当時の自然・人文条件を考慮しながら多角的に検討してみることは、将来の防災対策を講じる上に役立つところが大いなのではなかろうか。

小論を結ぶに当たり、このような発表の機会を与えて頂き、かつ有益なご教示を賜った立命館大学教授の吉越昭久先生を始め、京都歴史災害研究会会員の方々に厚く御

礼申上げる次第である。

注

- 1) 京都造形芸術大学編『京都学への招待』、飛鳥企画、2002、191頁。
- 2) 中島暢太郎「鴨川水害史(1)」、京都大学防災研究所年報、(26) B-2、1983、75～92頁。
- 3) 中央気象台・海洋気象台編『日本の気象史料(1)、暴風雨・洪水(復刻版)』、原書房、1981、404頁。
- 4) 前掲2)
- 5) 京都市歴史資料館編『若山要助日記 上』、京都市歴史資料館、1997、357頁。
京都市歴史資料館編『若山要助日記 下』、京都市歴史資料館、1998、348+28頁。